

今回作成されたルートマップ

親子で歩こう萩往還 ルートマップ



もちろんこの間にはコロナ禍があって延期せざるを得なかったわけである。今回のイベント開催に当たっては、防府市在住の語り部の皆さんが全面的に企画された。

雨が心配されたこの日、一般参加者2名と本日の語り部スタッフと勉強会として参加した語り部の合計18名が(?)、ルルサスわっしょい広場に集合した。冒頭、松村さんから諸注意、久保さんの開会挨拶、そして白井さんによる準備体操があって、予定通り9時少し前には出発した。なお、当初車塚の妙見神社で予定されていた紙芝居は雨模様のため中止となった。残念。

コースはルートマップおよび地形図を参照されたい。見どころは、三哲文庫跡、妙見神社・車塚古墳、うめてらす、兄部家本陣跡、防府天満宮、国分寺というものだ

2023年10月8日、久々に「親子で歩こう萩往還(三田尻塾)」が開催された。佐々並塾の開催が2019年10月5日だったから、実に4年振りの開催となった。

った。筆者は長らく防府地区のガイドをしていないので、久し振りの防府を十分に楽しめた。特に兄部家本陣のご当主による解説と初めて内部に入った国分寺が印象的だったし、松村さん、白井さん、兄部さん、藤井さん、桑原さんによる防府人ならではの詳しい解説も大変勉強になった。以下順を追って辿ってみることにしよう。



こちらはイオン防府の直ぐ近くの旧防府図書館跡地。枢密院顧問、台湾総督を歴任した防府出身の上山満之進が昭和 16 年に私費を投じて図書館を作り蔵書とともに市に寄贈した図書館(三哲文庫)のあったところだそうである。それにしても私費で図書館を作るとは！



続いて訪れたのは、妙見社・車塚古墳である。ここでは前々から気になっていた入口の狛犬の台座について質問したところ、これは昭和 13 年に造られたものだという。何が気になっていたかと言うと、台座に大内氏の家紋、大内菱と毛利家の家紋、一文字に三ツ星が「重なり合うように」並べて彫りこまれているからである。防府市在住の語り部の話によると、もともと車塚古墳は百済の国の第 26 代聖明王の第三皇子、琳聖太子の墓と言い伝えられており、かつ、この前を菟往還が三田尻御茶屋まで延びていることから、それぞれの時代に保護されたことからこの家紋が彫りこまれたらしい、とのことだった。昭和 13 年この仔犬を寄進した旧藤本町の久光氏は歴史詳しい人



だったのだろう。

この妙見社では秋の祭りで近隣の若者を集めて相撲が行われており、「カ石」と呼ばれる大きな石が置かれている。また今でも、どちらが先に泣くかを競う「あかちゃん泣き相撲」が行われているとのことである。微笑ましいもので、かつてテレビでみたことがあるような・・・。

車塚古墳については 2019 年秋に「大内氏のルーツ、その真意を探る」というバスツアーで訪れたことがある。この時には向かって左側の石室に特別に入らせてもらうことができた。引率者は伊藤九大大学院教授、真木山口大学教授という大内文化研究の泰斗とも言うべきお二人と山口、防府市の教育委員会の学芸員も加わっていた。その時の説明の中から興味深いものを以下に列挙する。

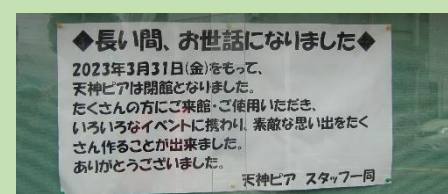
- 車塚古墳は、佐波川流域では最も大きい前方後円墳。西暦 570 年頃に造られたと推定される。
- 石室が二つあるのは県内でここだけである。
- 大内盛見が整備した。その背景には大内氏百済起源説
- 琳聖太子の崩御後、その車を埋めたことから車塚と呼ばれるようになった。
- 聖明王には子供は二人しかおらず、琳聖太子は明らかに実在の人物ではない。
- 車塚古墳は社殿があることで一部は壊されたが、逆に社殿があるからこそ、守られてきた側面がある。つまり、何とも残念なことだが、琳聖太子説は単なる物語と考えなければならないとのことだった。

長くなるが、もう一つ触れておきたい。この稲荷神社は別名「与三郎稲荷」である。そしてここに佐々並の民話で有名なキツネがいたとのことである。しかし、佐々並の民話の主人公は「弥三郎」であり、どうして名前が変わったのか、その辺りがよく分からない。



紙芝居の絵を描いた時に、当初「与三郎」と描いていたのだが、佐々並の知り合いの方から「弥三郎です！」と強く指摘されたのを思い出す。

さて、妙見社を出て、防府天満宮に向かって真っすぐ伸びる道を進む。ここはもともと大内氏が整備した道で「大内つくり道」と呼ばれていたそうである。旧山口銀行防府支店



前の交差点には、防府市で初めてつくられた

交差点であるらしく、丸い銅製の印が埋め込まれていた。また支店跡は「天神ピア」として活用されていたが、今年3月末をもって閉館となっていた。ますます商店街は寂しくなった。しかし、商店街手前の歓楽街は、かつて防府で勤務していた頃、度々訪れたところで、今も賑やかですよ、との説明があって、ほっとした。



続いて訪れたのは、宮市本陣兄部家跡である。残念ながら焼失して大部分は失われているが、上の写真は筆者が語り部の会の入会前、2009年10月25日に訪れた時の写真である。下はそれを元にして描いたイラスト。



ここではご当主兄部純一さんの興味深い説明があった。記憶違いがあるかも知れないが、以下に列挙する。

- もともと兄部家は鎌倉時代から続く家。
- もともとは宮市を本拠とする商家で、合物と呼ばれる塩魚や干し魚を扱う組合の長を代々務めており、江戸期には酒造業も行ってた。
- 過去3度火災に遭っているが、その度に、本陣であったことから、藩の援助もあって復興した。例えば、側

室の住まいだった英雲荘の一部を移築しているし、また右田毛利氏の山林の材木を使用して立て直しが行われてもいる。

- 伊能忠敬、毛利敬親も宿泊している。
- また、島津家は参勤の際には常宿としていた。
- 要人が宿泊する際には、家族全員が別宅に移動した。そういうこともあって、本陣を務めることは「名誉」なことでもあったが、「迷惑」でもあった。
- 幸い、蔵は焼失を免れ、兄部家に伝わる古文書はすべて山口県文書館に寄贈し、「兄部家文書」として保管。兄部さんは、花神子社参式のお世話のため、参加はここまでだったが、最後に粹な計らいをしていただいた、今も残る「瓦葺袖付棟門」を特別に開けてもらって、参加者はここをくぐって天満宮に向かったのである。なお兄部さんのご先祖兄部勇次氏は、戦艦長門の艦長だったとのことである。



続いては防府天満宮である。いつもの階段ではなくかつて野村望東尼が戦勝祈願のため通ったという「すずむし坂」を上った。この坂で鳴く鈴虫の音は天下一品だったとのことである。この話は聞いていたが、この坂を上がるのは初めてのことで、かなり急な坂を上りながら彼女の熱い思いを感じた。そしていつぞや古地図ウォークの際に教えてもらったことも思い出した。彼女が待ちわびた薩摩海軍は東の三田尻港に入ってきたとばかり思っていたが、実は桑野山の南面にある彼女の墓からほぼ真南に見える中関港だったということなどを。



この坂を上った先に春風楼がある。かつて裸坊祭り時には、そこで勢を上げたものだが、むしろ注目すべき

はその床下である。製作途中の五重塔の屋根の部分がつくりそのまま残っている。第十代萩藩主毛利齊熙公が文政5年(1822)に五重の塔を作ろうとしたが、政情不安などによって断念し、その屋根のみを床下に保存したものであるという。



菅原道真は学問の神様と言われているが、決して頭でっかちばかりの人ではなかったようで、大変な弓の名手であったとのだか。これは全く知らなかった。また防府天満宮が建立されたのは904年のことで、実は大宰府天満宮よりも先に作られている。また彼が防府に来た時は数え年の58歳で、それにちなんで58段の階段が設けられている。その階段を登り切った右手に天満宮への寄進者の石柱があるが、こ



こでも流石で、「金百円、宮市兄部敏明」とある。また道真公は「茶聖」とも呼ばれ、階段の中ほどにある茶室「芳松庵」があるのはそのため

のようだ。防府市で勤務していたころ、海外からの工場見学者が多く来られていたが、時間があれば、毛利庭園よりもこの茶室にお連れすることにしていた。庵内にはきれいな庭園と池があり、うる覚えの茶道の作法を説明して、四季折々の風情の中で行う抹茶体験は、とても好評だったのを覚えている。そして、うる覚えの、

After tea ceremony, please sit on the Tatami and look at a garden quietly as far as the time permits and try to keep your heart clean and clean with your eyes close. Maybe soon you will be able to get into the unknown zone of your own sprit. That is "one of Zen spirit, I think.

というセリフを吐くのである。下手な観光地に連れて行くより、外国人には茶室とお茶体験が一番である。庵近くの階段の中ほどから見上げるご神木のクスノキはとても立派だが、樹齢800年だそうである。

さて、次に向かったのは、この日のメインの「周防国分寺」。途中で、14.3mの水準点、幕末に志士たちに献金した岡本三右衛門の顕彰碑を過ぎると、国分寺の長い



辻塀が見えてきた。今を盛りと咲き誇る酔芙蓉が塀からあふれ出ていて、何とも美しい。国分寺は過去何度か訪れており、クスノキのイラストも描いているが、しかし、そこまで、お寺の仲間に入ったことはないから大変楽しみにしていた。



周防国分寺は756年に完成しており、現存する国分寺68か所のうち、一番古いのだそうだ。入り口にある重厚な仁王門は、最初の火事で焼失してから大内義興が立て直し、さらにその後毛利重就が修復したという。そこには例によって阿吽の木像が安置されていた。その門を通過して右手にはかつて七重の塔があったという。高さは瑠璃光寺の約2倍の60.5mだったそうである。さぞかし見ごたえがあったことだろう。

その後、待望の金堂内部に入った。残念ながら内部は撮影禁止だったので、大小50を超えるという仏像の写真は一枚もない。しかし、中央の薬師如来像、その左右の日光・月光菩薩、阿弥陀如来像、四天王像などを目の



前にすると大変な迫力だった。そして、そのほとんどが、国の重要文化財の指定を受けている。そもそも薬師如来は人間の心の病を救う仏だそうである。1417年火災で金堂が焼けた時に、薬師如来の左手は焼け残り、再建の際には再利用されたもの、との説明だったと思う。また、その左手が持つ薬壺には五穀、朝鮮人参などの薬、ガラスが入っており、全国でもここだけのものなのか。

入口には2本のクスノキの大木があったが、こちらの樹齢は600年、右奥にあるマキの木は1,000年、左奥



のケヤキは800年だそうである。萩往還にはそれほどの大樹はないが、防府には意外と大樹と呼べるものが多い。これも新しい発見だった。

今回のツアーで感じたことは、どなたかの解説にあったように、今回の見所は古墳時代から江戸時代まで、時間軸が1,000年以上はあって、頭の中で整理するのが

難しいとのことだったが、確かにそうであると感じた。そして、防府天満宮、周防国分寺の重要文化財の多さにはびっくりした。萩往還には重文がどこかにあったらうか。流石に周防の国府が置かれた土地だけのことはある。そしてそれに加えて、毛利博物館の国宝群・・・



ともかく、国分寺で本日のウォークは終了。そこからは天満宮前、山頭火の小道を抜けて駅前までもどり、白井さんの挨拶があって12:35に解散となった。ウォークの後で何名かは、この日行われた天神様の行事「花神子社参式」に参加したとのこと。いかがだったのだろう。

久しぶりの防府市内ウォークは、心配した雨にたたられることもなく、十分に堪能できるものだった。今回の企画をご準備頂いた防府在住の語り部の皆さん、お疲れ様でした。

ケヤキ 樹齢800年

マキ 樹齢1000年

※急いで書いたもので、誤字脱字、また誤りがあるかも知れません。その場合はお許しを。

(2023.10.9 古谷真之助 記)